

平成26年度文学研究科博士論文要旨

イギリス生まれの日本文学研究者 R. H. ブライス研究

——足跡と業績——

文学研究科英語圏文化専攻 吉村 侑久代

R. H. ブライス (Reginald Horace Blyth 1898–1964 以後ブライス) に関心を抱いたのは、筆者が英語俳句の創作、俳句の英訳、そして英語俳句の和訳に関わっていたことにより、ブライスの俳句の翻訳および彼の俳句観に興味を持ったことが出発であった。本論は、イギリス文学の教養と日本の禅を土台にしたブライスの俳句・川柳日本文学観の独自性をひも解き、イギリス人 R. H. ブライス像を描出することが目的である。ブライスはイギリスのみならず西洋文学、そして東洋文学と俳句や川柳を比較対照させ、それを解説することで自己の内的世界を表現した稀有な日本文学者であった。R. H. ブライスという人物像を母国イギリス、日本統治時代の朝鮮、そして戦後の日本での生きざまを纏めたブライス小伝と、彼の俳句観が鈴木大拙の禅仏教の伝播とともに、1960年代のアメリカの詩人にいかに受容され、影響を与えたかに焦点を当てた。さらにブライスとハケット (James W. Hackett) の禅俳句の系譜を描くことで、日本から欧米に自己の日本文化観を発信したブライスの姿を描いた。さらに先行研究が殆どなされていない「ブライスと川柳」を加えることができた。またブライスの朝鮮時代の資料は入手困難であったが、*How I became a Buddhist* 「余は如何にして佛教徒になりしや」(『文献報國』京城帝國大學圖書館 I (1939.7), II (1939.8), III (1939.9)) の新資料を入手した結果、ブライスの基督教徒から佛教徒への宗教的変遷を加えることができた。またブライスの年譜、ブライスの著作目録、さらにブライスの関する新資料を加えて論じた。

1994年にイギリス俳句協会は、日本滞在中にブライスと親交があったジェームズ・カーカップ (James Falconer Kirkup 1923–2009) イギリス俳句協会会長を中心に、ブライス没後30年を記念する『俳句のこころ』*THE GENIUS OF HAIKU Readings from R. H. Blyth on poetry, life, and Zen* (以後『俳句のこころ』) を出版した。この出版の目的は、イギリス俳句協会が生涯の大半を日本で過ごしたために母国イギリスにおいても認知されていな

い俳句の先達であるブライスを評価し、さらにブライスをイギリス俳句協会のシンボルに据えるというものであった。『俳句のこころ』のブライス小伝部分の執筆を担当したカーカップと、筆者の旧知であるイギリス俳句協会事務長のデビッド・コブ (David Cob) は、日本におけるブライスの生活に関する調査を筆者に依頼してきた。かねてよりブライスに関心を持っていたこともあり、この依頼が筆者のブライス研究を促進させた。

したがって本論執筆の目的は、日本の戦後社会において政治的にも文学的にも俳句の国際化においても功績のあるブライスが、母国イギリス、ましてや40年間過ごした日本においてさえもなお一部の関係者以外は知られていなかったブライスの人物像と、彼の俳句と川柳の解説に記述される日本文化観の研究を第一義とした。

日本の短詩型文学を外国人として初めて本格的に紹介したブライスの功績は、俳句・川柳・禅に関する彼の著書を通じて日本文化に出会った文学者が、1950年から60年代にかけて欧米諸国を中心に多数現われたことに示されている。特に、当時米国詩壇の一大潮流であったビート派詩人たちはブライスの影響を強く受け、彼らの中で「俳句は禅なり」と説くブライスの著書『俳句』を読破しなかった詩人はいなかったと思われる。そして米国の禅ブームとともに、ブライスの著書は俳句愛好者の聖典とみなされるようになった。したがって、俳句が世界各地で盛んに作られるようになった背景には、ブライスの著書の影響が少なからずあると言っても過言ではない。

ところが、英文で書かれたブライスの著書は、海外の愛好家には熱烈に支持されたものの日本人読者を獲得することは難しく、その後、現在に至るまで、日本の俳句界では彼の業績が紹介されることは少なかった。しかし、世界各地で多様な言語による俳句が盛んに作られるようになり、芭蕉、蕪村などの古典俳句から現代俳句にまで大きな関心を寄せる外国人研究者や詩人が多くなってきた昨今において、俳句紹介の先駆者としてのブライスの

業績を再考してみるのもあながち無意味なこととは思えないのである。

本論第一部では、『川柳にみられる日本人の生活と気質』の序文で、ブライスはアニミズム、菜食主義、俳句、禅、川柳の出合いを「内なる運命」と記しているが、筆者はさらにもう一つの「内なる運命」を政治へのかかわりと仮定し、ブライスの小伝に据えた。それはブライスが日本の天皇制維持に宮内省とGHQの黒衣として働き、一方で朝鮮時代から研究し続けた禅仏教、そして禅仏教を背景とした日本の俳句・川柳の翻訳を行った姿にほかならない。母国イギリスから京城帝国大学教員として赴任、そして日本での戦後から逝去に至るまでを小伝として記した。またブライスの業績の記述では『デジタル版日本人名大辞典』や『来日西洋人名事典』においても、禅と俳句のみに偏っているように、日本ではブライスの川柳への貢献は俳句や禅ほどには認識されていない。また「ブライスと川柳」に関する先行研究は殆どなく、ブライスの日本文化観や翻訳活動を語るには、俳句同様に川柳にも着目しなければならない。川柳を翻訳した最初の外国人であったブライスの川柳翻訳運動を英訳川柳史の中で捉えた。

本論一部の序章において、俳句の国際化として外国語俳句の位置づけを明確にする。第一節は「俳句を「無形文化財」に申請の動き」、第二節に「世界の俳句作品」、第三節に「外国語俳句の定義」、第四節に「21世紀の世界の俳句」、第五節に「ブライスの先見の明」を取り上げた。日本の俳句界が、外国語俳句をどのように見ようとしているか、俳句の国際化と合わせて論じた。

またブライスがすでに50年前の1964年に、俳句が世界の各地で詠まれることを予想していたという「ブライスの先見性」に着目し考察した。

第一章では「ブライスの再評価」を取り上げる。1994年にブライス没後30年を記念して出版された『俳句のこころ』*The Genius of Haiku* (The British Haiku Society)によって、ブライスは母国に里帰りすることが出来た。出版の経緯、出版の意義、またブライスが日本およびイギリスで正確に業績を認識されていない現状が如何に起こったかを記述する。序文を執筆したジェイムズ・カーカップとブライスの交流、最近のブライス研究の動向を紹介する。第一節に「イギリスで*The Genius of Haiku*の出版」、第二節は「ブライスとジェイムズ・カーカップ」、第三節は「最近のブライス研究」を取り上げる。

第二章「ブライスの小伝」では、前述のように彼の出生を掘り起こし、ロンドン時代、日本統治下の朝鮮時代、そして日本時代と彼の生きざまを俯瞰しつつ、禅と俳句

と川柳に捧げた彼のパーソナリティを追求する。ブライスと天皇制に関する著書にはすでに、平川祐弘著『戦いの海平和の海』や高橋紘・鈴木邦彦著『天皇家の密使たち―占領と皇室』などがあるが、ブライスの生涯を通じた小伝はイギリスでも日本でも書かれていないことから、イギリスの俳句詩人の協力を得て入手した資料や、前述したが、京城帝国大学教員時代のブライスの論文「余は如何にして佛教徒となりしや」(『文献報国』(京城帝国大学図書館, 1937)の新資料によって、ブライスが基督教から佛教徒になった事実を知ることができた。つまりブライスが朝鮮時代にすでに佛教徒に帰依したことを物語る資料であった。この資料で宗教に関する朝鮮時代の空白を埋めることができた。第一節は「内なる運命」、第二節は「ロンドン時代」、第三節は朝鮮時代、第四節は「日本時代」を取り上げる。

第三章「ブライスの主な著作物」では、『禅と英文学』、*The Cultural East, Haiku*『俳句』4巻の分析を中心にして、ブライスの俳句観を探る。ブライスの代表著書であり、東京大学より文学博士号授与の対象となった『禅と英文学』と『俳句』を紹介し、*The Cultural East*も加え、これら三冊の関連性を検証する。鈴木大拙とともに、主に占領軍の将校らに日本文化を紹介する英文雑誌*The Cultural East*はどのような目的で出版され、また意義を持っていたのかを検証する。2号で終刊となった*The Cultural East*は散逸し、幻の英文雑誌と云われている。*The Cultural East*の内容を紹介し、その位置付けを試みた。*The Cultural East*にはブライスの初期の論文が掲載されて、その内容はブライスの著書『俳句』の草稿となった。第一節は「『禅と英文学』」、第二節は「*The Cultural East*」、第三節は「*Haiku 4 vols.*『俳句』4巻」、第四節「ブライスの俳句観」を取り上げる。また*The Cultural East* Vol. 1, No. 1のeditorialの日本語訳を巻末の資料に加えた。

第四章「ブライスと川柳」では、ブライスの俳句活動や禅への傾斜を語る資料や先行研究はあるが、ブライスの川柳翻訳に関する研究は現在に至っても僅少である。むしろ殆どないと言っても過言ではない。ブライスの日本文化観や翻訳活動を語るには、俳句同様に川柳にも着目しなければならない。そのため川柳英訳史として川柳の英訳の歴史を概観し、その中でブライスの業績を考察する。第一節は「英訳川柳の黎明期から興隆期まで」、第二節はブライスと川柳の出合い、第三節は「ブライスと川柳人の出合い」、第四節は「川柳は諷刺詩：(『世界の諷刺詩川柳』の出版)、第五節は「ブライスの川柳観」、第六節は「俳句と川柳の違い」、第七節は「ブライスの

創作した俳句と川柳」, 第八節では「川柳の現況」を取り上げる。特に第七節の「ブライスの創作した俳句と川柳」では、俳句や川柳の創作に関心がなかったブライスであるが、二句の俳句、(葉の裏に青い夢見るかたつむり)と辞書の句として、(山茶花に心残して旅立ちぬ)を残した。最近ブライスの詠んだ川柳、(ねずみ取り買うぼんさんのまあるい目)が発見された。これらの作品成立の経緯を読み解く。

本論第二部では、アメリカにおけるブライスの受容と影響を検証する。第二次世界大戦後の俳句の海外普及は、ブライスに負うことが大であり、彼の功績を抜きにしては語れない。戦後アメリカでは、日本文化や日本の宗教への強い関心が湧き起こった。俳句への関心も例外ではなく、鈴木大拙の説く禅仏教とともに高まった。1960年代には多くの若い詩人がブライスの影響を受けた。サンフランシスコやバークレイの知識階級の若者の間に広がった東洋思想や、東洋の宗教への関心はヨーガや禅の実践、そして日本の俳句へと彼らを誘った。またブライスの禅と俳句はアメリカの英語俳句運動と結びついた。今日、世界各地で俳句を作る詩人のほとんどが、英語で書かれたブライスのHaiku『俳句』4巻を入門書の一つとして参考しているほど、彼は俳句紹介の先達としての役割を果たしてきた。禅と俳句を同義語におくブライスが著わしたHaiku『俳句』は、ジャック・ケルアック(Jack Kerouac)をはじめ、アレン・ギンズバーグ(Allen Ginsberg)、ゲイリ・スナイダー(Gary Snyder)、リチャード・ライト(Richard Wright)、J. D. サリンジャー(J. D. Salinger)ら詩人や小説家に多大な影響を与え、1950年から60年代のアメリカの文壇や詩壇を席卷したのである。現在、俳句は世界各地で作られ世界各地に俳句愛好家協会があるほどグローバルに浸透しているが、その世界への普及の基盤を作ったアメリカ俳句とブライスのメンターとしての業績を検証する。

第一章は「ブライスに影響を受けたアメリカの詩人」を紹介する。第一節「ブライスのアメリカ俳句への影響」、第二節「ジャック・ケルアックと俳句」、第三節「アレン・ギンズバーグと俳句」、第四節「アメリカ俳句の真髄」を紹介することで、今日のアメリカ俳句の礎を築いた1950年代から1960年代のアメリカ俳句を紹介するとともに、ブライスに依ってもたらされたアメリカ俳句の特質を明らかにする。

第二章「ジェイムズ・W・ハケットの世界」では、ブライスを師と信奉するハケットが如何にブライスと禅俳句でリンクしたか追求することが目的である。アメリカ俳句の創始者の一人である禅俳句の巨匠、ジェイムズ

W.ハケット (James W. Hackett) は、ブライスの唯一の弟子として、「俳句の道は人の道なり」(the way of haiku is the way of man)をモットーに現在も詩作を続けている。俳句を禅仏教と結びつけて欧米に広めたのは鈴木大拙やブライスであるが、それを創作として具現化し、創作の上で俳句は禅なりという俳句観を確立したのがハケットである。第一節「ハケットと俳句の出合い」、第二節「ブライスとの交流」、第三節「ハケットの俳句観」において、ブライスからハケットへの禅俳句の系譜を論じる。さらに第四節では、「川柳・俳句の3行訳の定着」を加え、3行訳の定着までの経緯を考察する。ハロルド・G・ヘンダーソン(Harold G. Henderson)の*The Bamboo Broom* (1933)の3行訳をきっかけとして、ブライス、ハケットが影響し合った結果、俳句と川柳の英訳は3行に定着した経緯を考察する。

第三章「俳句に魅せられた駐日外交官」では、英語圏以外の国を代表して、スウェーデンの俳句と、その俳句受容の経緯を取り上げた。特に1960年代には、鈴木大拙の禅著書やR. H. ブライスの俳句著書に影響を受けた詩人が、アメリカのみならずスウェーデンをはじめ他の英語圏以外の国でも多くみられた。スウェーデンの俳句受容は、日本では話題になることは皆無であったが、前駐日スウェーデン大使のラーシュ・ヴァリエ(Lars Vargö 1947-)の「スウェーデンとヨーロッパの俳句」の講演(大垣芭蕉記念館2014.5.8)を通してスウェーデンの俳句受容を検証した。

本論は以上であるが、英語俳句の世界的な普及の結実として英語俳句作品集*We Are All Japan*の出版について述べたい。2011年3月11日に発生した東日本大震災は、日本だけでなく海外の諸国にも衝撃が走った。震災一年後の2012年に、セルビア在住の俳句詩人ササ・ヴァジック(Sasa Vazic)とフィリピン在住のアメリカ人詩人のロバート・ウィルソン(Robert Wilson)は*We Are All Japan*を出版した。*We Are All Japan*の内容は、大震災後の津波、原発後の災害は日本で起こったことであるが、どの国にも起こる可能性があると感じた世界各地の俳句詩人が、日本人は孤立していないと呼びかける英語俳句選集である。21ヶ国、98名の俳句詩人が参加した。インターネットをはじめとした通信機器の発達で世界に普及した俳句は、言語のバリアを越えて繋がっていく文芸形態に成長したのである。もしもR. H. ブライスが生きていたら、どのような見解を述べるであろうかと、*We Are All Japan*の日本の窓口を担った一人として思うのである。